

花と愛

花が散るころ、その人のお嬢さんは北国へ旅立って行った。大学入校のうれしいはずの旅ではあるが、別れる母子の胸には一抹の悲しみが糸のように長く引いているようだ。

父は仕事の関係もあつてか、花のころは毎夜宴会続きで、とうとう顔を合わすこともなかった。女手二人で荷造りし、窓口まで運んだが、何かしら重かった。「お父さんに、さようならいたくない」と言った彼女は、異国の下宿で母が結んだ荷緒を解きながら、きつと冷えきつた思いに打ち沈んだことだろう。

しかし、青春は憂いを友とする。憂いは深いほどよい。娘よ、新しい門出もほろ苦い思いを友とすればこそ、人生を深く味わうことの始まりであることを、やがて知るだろう。母よ、思い沈まぬがよい。青春とは負けをしらぬ力だから。

もう五十年近く過ぎてしまったが、夫人が嫁して来た時、しゅうとめは庭のあのサ

ルスベリは息子が大学に入った時に植えたが、紅い花をつけるころ帰省してくれたと語っていた。その知恵に習って夫人は長男のために白いサルスベリを植えて、子の夏帰省を心待った。美しいことはまねても美しい。

人は逝く。でも花の紅白はその人の心を長く伝え続けるだろうか。

某日、嫁が私に告げる。―きょう、紙人形の先生と歩いていたら、道ばたの草を指して名前を聞かれたのよ、犬ふぐりでしょうと答えると、びっくりなされたから、父に教えられたというと、いつそう感心されたらしく、あなたのお父さんはロマンチストですね、地面にはうように小さく生きている雑草の名を教えて下さるんだから、とおっしゃるんです。なんだかとてもうれしくて…。

空の色をそのままに写し取ったような小さな花卉、それをじーっと見つめ続ける間、きまっただように私の心はいつのまにか多くの人たちとのふれあいをたどっている。

(一九八〇年五月十日)